橘小島崎は宇治橋の川下貳町にありしなり。〔平家物語に曰、平等院の艮橘の小島が崎より武者二騎引かけ〳〵出来り、一騎は梶原源太景季、一騎は佐々木四郎高綱なり。人目には何とも見えざりけれども、内々先きに心をかけたるらん、梶原は佐々木に一段ばかりぞ進んだる。佐々木、如何に梶原殿此河は西国一の大河ぞや、腹帯延て見さうぞ縮給へと云ひければ。梶原さもあるらんとや思ひけん、手綱を馬のゆがみに捨、左右の鐙を踏透し、腹帯を解てぞ縮たりける〕

続　古　　光　　俊

咲匂ふ小島が崎の山吹や八十うぢ人のかざしなるらん

同　　太　上　天　皇

袖の香や猶とまるらん橘の小島によせし夜半のうき舟

源氏物語　兵部卿の宮宇治におはして、河よりおちなる人の家に四阿屋の宮をいで行て、かひいだき舟にのり給ふ、御供の人々これなん橘の小島と申て、御舟さしとゞめぬれば、かれ見給へや八千とせもふべき翠のふかさをばと宣ひて、兵部卿

年ふとも忌れん物か橘の小島が崎にちぎるこゝろを

女もめづらし道のやうに思ひてあづまの宮

橘のこ島は色はかはらじを此行舟ぞ行衛しられぬ